

God With Us

Part 4: The Life and Writings of Solomon

Vision and Vanity - Ecclesiastes

Message 15- God in the Picture

Ecclesiastes 2:24-5:7

神は我らと共に

パート4：ソロモンの生涯と執筆

視覚と虚栄心 - 伝道の書

第15メッセージ-神を視野に

伝道の書 2 : 24 - 5 : 7

はじめに

ソロモンは、伝道の書1-2章で、「日の下」の人生（すなわち、神と永遠のいのちから離れて）には意味を見出すことが出来なかったと言った。次に、神に視点を置くことによってソロモンの考え方は一変する。私たちの住むこの世は、呪いの結果、墮落してしまった（創世記3:14-24）。楽園から追放されてしまったので、この世の人生において、常に苦痛を体験することとなった。信仰の目をを用いて、神から目をそらさずに、この人生を生きることが鍵である。使徒パウロの言葉を借りると、「私たちは、神を崇め、感謝しなければならない。」そうでなければ、その無知な心は暗くなる。

（ローマ人への手紙1:21）

人生を神からの贈り物として見る： 2 : 24 - 26

ソロモンは、究極の満たしを見つけるために無駄に追求を試みた。まるで追求自体が神々であったかのように。しかし、心の最も深いところにある欲望を満たすことのできるもの（知恵、快楽、事業、所有物、性的交わり）は存在しないという結論にた

どり着いた。そうすると、それらの追求が神として代わることは決してない、むしろ、それらは全て真の神からの賜物であることが見えてきた。

人は食べ飲みし、その労苦によって得たもので心を楽しませるより良い事はない。これもまた神の手から出ることを、わたしは見た。だれが神を離れて、食べ、かつ楽しむことのできる者がある。神は、その心になう人に、知恵と知識と喜びとをくださる。しかし罪びとには仕事を与えて集めることと、積むことをさせられる。これは神の心になう者にそれを賜わるためである。これもまた空であって、風を捕えるようである。

（伝道の書 2 : 24 - 26）

上記の表現は、この後も全体の中で繰り返される（参照：3:12-14、3:22、5:18-20、8:15、9:7-9）。壊れた世の中にあっても満たしを見出す方法がある。先ず、飲食、仕事、娯楽、知識、幸福、富、それらすべてが神からの贈り物であるということ認識する必要がある。もし、それらの贈り物を当たり前権利としてではなく、感謝と満しをもって受け取るなら、それらの贈り物を楽しむことが出来る。

新約聖書の中で使徒パウロは、霊的であることは神の優雅な贈り物を楽しむことの特権を否定することに基づいていると主張する偽教師について警告している：

これらの偽り者どもは、結婚を禁じたり、食物を断つことを命じたりする。しかし食物は、信仰があり真理を認める者が、感謝して受けるようにと、神の造られたものである。神の造られたものは、みな良いものであって、感謝して受けるなら、何ひとつ捨てるべきものはない。それらは、神の言と祈とによって、きよめられるからである。

（第一テモテ 4 : 3 - 5）

人生のあらゆる季節に神を見る： 3：1－8

神からの贈り物の中で、本質的に前向きなもの（例：健康、富、成功、命、良い人間関係、等）を受けて楽しむのは容易いことである。何か良いと感じることを経験した際、「神様は素晴らしいですね。」というコメントをよく耳にする。墮落した世界に生きるための鍵は、季節が肯定的なものであろうと否定的なものであろうと、あらゆる生涯の真っ只中に、良い神があらわれることを見ることである。人生がさほど良くないと思われる時でさえ、神は素晴らしい神である。

次の非常に詩的な部分は、より困難な側面に置かれているものであっても、あらゆる活動のために適切な季節があることを教えている。

天の下のすべての事には季節があり、
すべてのわざには時がある。

生るるに時があり、死ぬるに時があり、
植えるに時があり、植えたものを抜くに時があり、

殺すに時があり、いやすに時があり、
こわすに時があり、建てるに時があり、

泣くに時があり、笑うに時があり、
悲しむに時があり、踊るに時があり、

石を投げるに時があり、石を集めるに時があり、
抱くに時があり、抱くことをやめるに時があり、

捜すに時があり、失うに時があり、
保つに時があり、捨てるに時があり、

裂くに時があり、縫うに時があり、
黙るに時があり、語るに時があり、

愛するに時があり、憎むに時があり、
戦うに時があり、和らぐに時がある。（伝道の書3：1－8）

上記の14の対立事項は、この墮落した世界での人生に訪れる広い振り子を思い出させる。しかし、私たちは何らかの無

慈悲な運命に動かされている無意味な回転木馬（ソロモンが描写したような）に乗っているのではない。むしろ、壊れた世界に住んでいるけれども、全知全能であられ、愛情豊かで、偉大な、慈悲深い父なる神が、天と地を監督されている。主はその玉座を天に堅くすえられ、そのまつりごとはずべての物を統べ治める。（詩篇103：19）宇宙で起こることの一切は、神の影響、許可、権限の内にある。したがって、人生のあらゆる状況において、生きるすべての季節において、どんな困難な状況に置かれているときであっても、神が定められたと信じるとき、神を信頼し満たしを得ることが可能となる。

自然の全てが「季節」を誇示する。人生にもまた季節がある。人生が季節に満ちていることを受け入れることは、自分自身について、神について、人々について、人生についての学びを反映しながら、厳しい季節の間、休息するために役立つ。「良い季節」にいるとき、それが決して変わることも終わることもないことを祈っても、現実はいつか変わり、終わりが来る。ですから、良い季節は、神からの贈り物として受け取りましょう。神の示唆と見えない働きに注意を払い、厳しい時と良い時の両方で責任をもって対応することを選択しましょう。あなたの人生の過ぎ去った季節と今の季節について考えて、神が何を学ばせようとしておられるのか、また、どこへ導こうとしておられるのか書き留めてみましょう。神の主権はすべての季節にわたって支配する。

人生に焦点を当てた8つの視点： 3：9－22

ここから先は、神と永遠に関する格言集である。（その間、「神」が11回に及び触れられている。）それらの言葉の文脈は重要である。墮落し壊れ、苦難溢れるこの世の中で、賢明に生きる方

法を教えようとしている。「日の下」の生活がより意味深く満たされるための確かな真実が「日の上」には存在する。

1. 任命

「神のなされることは皆その時にかなって美しい。」
(伝道の書 3 : 1 1 a)

「皆」とは、文字通りすべてという意味である。「美しい」という訳は、「適切である」や「正しい」とも訳されている。そこが伝道の書を理解する鍵となる。たとえ詩の否定的な側面に置かれても、神が人生の特定の季節にそれらを任命されたことは適切である。神に間違いはない。すべてに時間と季節が任命されている。そのことを信じる選択をすることによって、この地球上にうねりあがる嘘に対する立ち向かい方が変わる。

2. 永遠

「神はまた人の心に永遠を思う思いを授けられた。」
(伝道の書 3 : 1 1 b)

「永遠に終わりませんように」と口にされたことがありますか？ 私たち人間は神に似せて造られている。神は永遠である。私たちもまた、永遠に生きるために創造された。実際、私たちが「死」んでも、どこかで生きるという意味では、不滅の存在である。だから私たちは、この世を超えて何かを望んでいるのです。魂は樂園を待ち望んでいる—「永遠の幸せ」。私たちは永遠に生きるように配線されている。

キリスト教徒の伝統的教えは、神が、創造、良心、キリスト、律法を通して、ご自身を明らかにしてくださっていると主張する。したがって、内在する神と永遠の意識は、私たちにご自身を明らかにしてくださるために、永遠に恵まれた時

間と空間から踏み出してくださった神によって満たされる。私たちの視線が永遠を見るために時間の縛られた世界を越えるとき、私たちの生活は劇的に変化する。

3. 神秘

「それでもなお、人は神のなされるわざを初めから終りまで見きわめることはできない。」 (3 : 1 1 c)

しかし、神は永遠を心に定めておられ、様々な手段でご自分の姿を明らかにしてくださっているが、天国のあちら側にはまだまだ多くの謎がある。私たちは、ぼやけたレンズを通して、神を見、そのやり方を知覚する。使徒パウロでさえ、自信の理解の限界を認めた：

わたしたちは、今は、鏡に映して見るようにおぼろげに見ている。しかしその時には、顔と顔を合わせて、見るであろう。わたしの知るところは、今は一部分にすぎない。しかしその時には、わたしが完全に知られているように、完全に知るであろう。(第一コリント 13 : 12)

ですから、置かれている状況に関わらず、突き進む勇気を生み出すためには、神への信仰(信頼)が必要である。

ああ深いかな、神の知恵と知識との富は。そのさばきは窮めがなく、その道は測りがたい。「だれが、主の心を知っていたか。だれが、主の計画にあずかったか。(ローマ 11 : 33, 34)

4. 満たし

わたしは知っている。人にはその生きながらえている間、楽しく愉快地に過ごすよりほかに良い事はない。またすべての人が食い飲みし、そのすべての労苦によって楽しみを得ることは神の賜物である。(伝道の書 3 : 1 2, 1 3)

ソロモンは、2章24-26節で述べたことを繰り返す。ギリシャの悲観的哲学者は、次のように言った：「明日死ぬ前に、飲み食いしようではないか。」ソロモンの言葉に似たところがあるが、明確な違いがある。ソロモンは、飲み食いは神から人類への贈り物であると見ている。喜んでいなさい、良いことをしなさい、食べ物と飲み物を楽しみなさい、責任を持って生きなさい、勤勉に満足することを学びなさい。なぜなら、すべての息吹、地上のあらゆる喜び、働きについての有益な機会も神からの贈り物であるからです。

使徒パウロは、ローマの獄中からの手紙の中で、自信がどのようにあらゆる状況で満たされていることを学んだかを記している。

ふたりが一緒に寝れば暖かである。ひとりだけで、どうして暖かになり得ようか。人がもし、そのひとりを攻め撃ったなら、ふたりで、それに当るであろう。三つよりの綱はたやすくは切れない。貧しくて賢いわらべは、老いて愚かで、もはや、いさめをいれることを知らない王にまさる。(ピリピ4：11-13)

あなたは満たされていることを選択し、神があなたにしてください。働きの満足しておられますか？あなたは育児中ですか？勉学中ですか？働き盛りですか？健康問題に苦しんでおられますか？不平不満を言っておられますか(ピリピ2：14)？それとも、喜び感謝することを選んでおられますか？満たしを覚えることは選択肢である。

5. 永続

わたしは知っている。すべて神がなさる事は永遠に変ることがなく、これに加えることも、これから取ることもできない。(伝道の書3：14a)

人の営みも活動も一時的である。私たちは今ここにいる、そして明日には過ぎ去ってしまう。それでも、神は不変で(マラキ3：6)であられ、その御心も御働きも永遠に続く。神の究極の目的は果たされる。「風を捕える」(伝道の書の中で9回繰り返されている。)という表現は、「神の御霊によって進む」(ガラテヤ5：25)という表現に置き換えることが出来る。神の永遠の、不変の目的とご計画に加わるとき、私たちの営みや働きは永続的な価値と意味を持つようになる。

ここに、神の神秘的な働きの根底にある神聖な動機がある：神は、全ての人をご自身に引き寄せようとしておられる。その事実は、この世界において、なぜ多くの苦痛を経験するのかを説明するのに役立つ。

「喜びを無視することが容易であるが、痛みを無視することは難しい。神は喜びの中で囁かれ、良心の中で語りかけられ、痛みの中で叫んでおられる：痛みは、耳に届いていない世界を呼び起こすために神がお使いになるメガホンである。
C.S. Lewis – The Problem of Pain

神がすべての苦痛、すべての苦しみ、すべての悪をこの一端に繋がれ管理して下さっていると切り切ることが出来る：すべての人々に喜びをもって、神の内に避けどころを見つけるよう呼びかけるために。

「神を恐れる」とは、常に神を恐れているということではない。むしろ、神に対する敬意と畏敬の念を持つということである。神があなたの人生で好ましくない状況をお許しになるとき、あなたはどのように反応しますか？神を責め、怒り、神に信頼を置くことを止めますか？それとも、畏敬の念と恐怖の態度を選択し、「主よ、あなたがなさっておられることや教えようとなさっていることが理解出来ませんが、あな

たは素晴らしいお方であられることを信じ、この季節の間もあなに従います。」と言えるでしょうか？

7. 責任

わたしは心に言った、「神は正しい者と悪い者とをさばかれる。神はすべての事と、すべてのわざに、時を定められたからである」と。(伝道の書3:17)

神と永遠の現実とは、不注意にでなく、責任を持って私たちが生きることがを求めます。この課題は、この書の最後の句で繰り返される(参照:12:13, 14)。絶望に降伏するのではなく、永遠が私たちのすべての活動の価値を明らかにすることを認識しなければならない。苦しみに対応する方法さえも、私たちのための神のご計画と目的に照らして評価される。

8. 死

人の子らについて心に言った、「神は彼らを試して、彼らに自分たちが獣にすぎないことを悟らせられるのである」と。人の子らに臨むところは獣にも臨むからである。すなわち様に彼らに臨み、これの死ぬように、彼も死ぬのである。彼らはみな同様の息をもっている。人は獣にまさるところがない。すべてのものは空だからである。(伝道の書3:18, 19)

神は、私たちに死を思い起こさせることを許される。その様な定期的なリマインダーは、この短い人生の中で賢明に奉仕するように促してくれるという点では良いことです。ですから、後にソロモンは、葬儀に出席することには大きな価値があると言う。

悲しみの家にはいるのは、宴会の家にはいるのにまさる。死はすべての人の終りだからである。生きている者は、これを心にとめる。(伝道の書7:2)

人間の誇りは、私たちが無敵であると信じさせる。神は、人生を通して、真偽確認のために私たちに試される。人生は壊れやすく、希薄で、制御できないことを思い知らされた試練の数々を思い出すことが出来ますか？ヤコブの手紙4章13-15節をお読みください。明日を制御し、自分の運命を決める能力について自慢してはならないと警告している。

伝道の書の鍵となる課題: 4-5

[注意: 伝道の書の1-3章(完全な絶望は現実的な希望につながる。)は、考え方の明確な進展の様に聞こえるが、第4章以降は、無作為な考え方(箴言の様)のように読める。コメントーターも、伝道の書4-12章の明確な概要を検出することは不可能であることに同意している。さらに、ソロモンの見方にはばらつきがある様である。多くの箇所において、1章と2章で見た悲観主義と懐疑主義を反映していながら、別の箇所においては、第3章の現実と希望と信頼の融合に向けて傾く傾向を反映している。伝道の書4-12章のすべてをカバーすることは出来ないため、是非ご自分のペースで熟読されることをお勧めする。

人間関係の重要性: 4:9-12

この世界は、人間の抑圧(4:1-3)、闘争と孤立(4:7-8)に満ちている(伝道の書4:7-8)。ですから、共に旅することができる良い人たちを見つけることが重要である。

ふたりはひとりにまさる。彼らはその労苦によって良い報いを得るからである。すなわち彼らが倒れる時には、そのひとりがその友を助け起す。しかしひとりであって、その倒れる時、これを助け起す者のない者はわざわざである。またふたりと一緒に寝れば暖かである。ひとりだけで、どうして暖かになり得ようか。人がもし、そのひとりを攻め撃ったなら、ふたりで、それに当るであろう。三つよりの綱はたやすくは切れない。（伝道の書 4:9-12）

「ふたり」とは誰か、親しい友人か、婚姻やビジネスによるパートナーか、身近な教会のコミュニティーや家族の一員かについては、明確にされていない。重要なのは、孤立は致命的であるということである。二人は一人よりも良い。三人はもっと良い。地域社会に関わる生活は不可欠である。（「ふたり」とは夫婦を参照しており、「3番目」はキリストを参照すると理解している人もいる。確かに、キリストが三つよりの綱の強い一本であるなら、その組合は壊れにくい。目標は、キリストの強さを一人一人の心の中心、また、人間関係の中心に置くことである。）

コミュニティーにおいて、少なくとも一人と繋がっておられますか？それとも、誰とも繋がらずに孤立しておられますか？誘惑や中毒の力は孤立している時に最強となる。困難や誘惑に溢れる世界に立ち向かうためには、仲間が鍵となる。あなたの周囲にコミュニティーに招き入れるべき人はいませんか？もし、孤立していると感じておられるなら、神を愛する安全な人と繋がるための第一歩を踏み出しましょう。

神の御前に耳を傾け話す： 5：1－5

神に近づく方法について、ソロモンは多く語っている。私たちは、自分の考えを神に聞いていただくのではなく、もっと神の声に耳を傾けるべきである。

一神に耳を傾けることについて：

神の宮に行く時には、その足を慎むがよい。近よって聞くのは愚かな者の犠牲をささげるのにまさる。彼らは悪を行っていることを知らないからである。神の前で軽々しく口をひらき、また言葉を出そうと、心にあせってはならない。神は天にいまし、あなたは地におるからである。それゆえ、あなたは言葉を少なくせよ。（伝道の書 5：1，2）

「静まって、わたしこそ神であることを知る」（詩篇 46 篇 10 節）という教えがなぜ重要なのでしょうか？人間関係において、お互いが話し手になって、また、聞き手になるとき、相互に関係が成り立っている。神の御声を聞くためには、どうすればよいのでしょうか？神に聞くためには、心を静め、あなたが気づく必要がある何かを明らかにしていただくように神に求めることが必要である。幼いサムエルは言いました「しもべは聞きます。お話してください。」（第一サムエル 3：10）神は、あらゆる手段を用いて語り掛けてくださる：神のみ言、聖書の学びの会や説教で学んだこと、賛美の歌、最近の会話や葛藤、私たちが言ってしまった事や、やってしまった事に対する罪悪感、考えていること等。 1) 心を静め、とにかく聞く態勢に入る。 2) 感じられる促しや思考に行動することを望む。 3) 結論まで行動を継続する。友人や指導者に、神に従う責任が保てるように協力を依頼する。

一神に話すことについて（誓いを立てる）：

あなたは神に誓いをなすとき、それを果すことを延ばしてはならない。神は愚かな者を喜ばれないからである。あなたの誓ったことを必ず果せ。あなたが誓いをして、それを果さないよりは、むしろ誓いをしないほうがよい。あなたの口

が、あなたに罪を犯させないようにせよ。また使者の前にそれは誤りであったと言ってはならない。どうして、神があなたの言葉を怒り、あなたの手のわざを滅ぼしてよかろうか。夢が多ければ空なる言葉も多い。しかし、あなたは神を恐れよ。（伝道の書5：4－7）

神に誓ったことや交わした約束を守ることは、言葉に忠実であることを証明するための選択である。忠実な御霊の実りである（ガラテヤ人への手紙5：22）。人間はいとも簡単に忠実であることから揺れ動いてしまう。神ご自身が、忠実な愛で救い主であられる。「あなたの神である主は忠実な神である。」（申命記7：9、第一コリント1：9、10：13、第二テサロニケ3：3、第一ヨハネ1：9）あなたが果たさなかった誓いが、神に尋ねましよう。忠実に最後まで約束を果たしましよう。神の忠実さをあなたにもたらして下さるよう頼みましよう。